

[寄稿論文]

ヴィシー期フランスの失業対策庁による音楽政策： 音楽家のための錬成所の実態と変遷(1940-42年)を中心に

田崎 直美

1. はじめに

近年フランスを中心に、第二次世界大戦中であるヴィシー期(1940-44年)フランスの音楽文化研究は進んできた¹。しかし、そのなかでまだ十分に考慮されていない重要な視点がある。その一つが、失業対策と音楽家との関わりである。ヴィシー政権は、国土の占領と戦争捕虜を帰還させてもらえないことに伴う深刻な経済的低迷、そして失業問題を解決するために、社会構造改革による経済再建に乗り出す。この新しい構造にすべての職業を組み込む初期段階において、非常に短期間ではあるが、ヴィシー政権は職を失った音楽家を「知的失業者」として社会保障制度内に取り込むことを考慮した。この点は、フランスの文化政策史上注目されることである。なぜなら、音楽家(演奏家)への失業対策や社会保障は、第五共和政期からようやく考慮されたと考えられてきたからである。

これまでのフランス文化政策史では、主に国家による「芸術政策」の有無という観点から調査および考察がなされてきた。そのためヴィシー政権の音楽政策としては、国民教育省の芸術局(le Secrétariat général des Beaux-Arts)が1938年5月に開始した「現存する美術家および作曲家に対する、失業対策としての特例的作品委嘱」制度の継承しか注目されてきていない²。しかし筆者は、同じヴィシー期フランスの音楽文化について、フランス国立公文書館の史料をもとに独自に検証してきた³中で、ヴィシー期に新設された国家機関である「失業対策庁 le Commissariat à la Lutte contre le Chômage」(以下CLCと略記)が「新しい試み」⁴として失業中の芸術家(音楽家を含む)の生活保障・活動支援を自主的に展開していたことに着目する。

第三共和政府における芸術局は、音楽家やその家族の救済手当を予算に組むことがあったが、微々たる額であった。また、1939年には国立知的職業再雇用センターが設立されている。ただしこれらの諸計画は、戦争勃発により立ち消えとなっていた⁵。それが国土の約60%をドイツ軍に占領された時期において初めて、フランスはCLCを通じて国家主導で芸術家(音楽家)支援に乗り出したのである。本研究は、CLCヴィシー支部⁶が主体的に結成・運営したオーケストラが、失業音楽家のための錬成所(職業訓練のための集団)としての性格を有したことに着目して、その成立背景、活動内容とその特徴をフランス国立公文書館の調査史料から明らかにする。それとともに、なぜこの「新たな試み」がこれまでのフランス文化史、文化政策史のなかで着目されてこなかったのか、その要因を考察することを目的とする。

2. 失業対策庁による音楽家のための錬成所について

(1)失業対策庁(CLC)設立背景

1940年6月22日、侵攻してきたドイツ軍との休戦協定により、パリを含むフランス北部はドイツ占領地区となった。フランス政府は地方都市ヴィシーを新たな首都として、本土ではフランス南部の非

占領地区にてかろうじて主権を保つ形になる。この年の秋、ヴィシー政権の喫緊の課題の一つは、フランス人の失業対策であった。占領によりフランスの工業生産高は著しく低下したが、それに加えてドイツ当局は、ドイツにとって利益にならないと判断した企業・工場を閉鎖に追い込む。これにより、北部の占領地区を中心にフランスでは失業者が急増した。それに加えてモントワール会談(1940年10月24日)後にはアルザス・ロレーヌ地方等にドイツ人が入植することになり、その土地の住民であったフランス人が強制退去させられることになる。かくしてフランス人難民が、リヨンを中心とする南部非占領地区に押し寄せた。1940年11月半ばには、フランス人求職者は100万人以上になっていた(MAUX-ROBERT 2002 : 55)のである⁷。

1940年10月11日、国家労働局事務局内に「失業対策庁」(CLC)が、フランスで初めて設立された⁸。本部がパリ(北部占領地区)に、支部がヴィシー(南部非占領地区)に設置される。失業者たちは現政権に不満を募らせて抵抗分子となる可能性があるため、ヴィシー政権は早急に対処する必要に迫られたのである。CLCの最初の主要事業は、「錬成所 *chantier*」を至る所に作って大規模土木工事を発注し、大勢いる労働者階級の再就職を促すことであった。CLCヴィシー支部長モー(MAUX, Henri : 1901-50)が1942年4月に記した報告書⁹(以下『報告書』)によると、この目標は早々に達成できた(『報告書』p.3)。

(2) 音楽家のための錬成所の設立背景

次なる動きとして1940年12月2日、CLCヴィシー支部(以下、CLCはヴィシー支部を指す)は、技術者、建築家、芸術家などの知識人の失業も救済対象として含める旨を、ラジオにて公表する。CLCは、先の錬成所組織の経験を活かして非肉体労働者用の失業対策計画を応用すべく、「知識人錬成所 *chantiers d'intellectuels*」を新設した。当時国内の失業知識人は8万人と推定された(MAUX-ROBERT 2002 : 69)。彼らに対して知識人錬成所では、各省庁と連携しながら、通常の職業斡旋、および戦争捕虜となった公務員ポストの暫定的穴埋めや、フランス全土での労働調査における専門業務の補佐などで社会復帰支援に成功していた(『報告書』pp.3-4)。

この「知識人錬成所」と同様の努力が、失業芸術家に対しても試みられる。当時、数千人の芸術家(喜劇役者、歌手、合唱団員、器楽奏者、舞踊家)が活動停止に追い込まれ、極度に不安定な状態にあった。彼らはドイツ軍侵攻時にパリから非占領地区に逃れてきたが、地方の劇場や演奏会場のほとんどは閉鎖して就職口がなかった。そのうえ彼らは、文化活動が再開したパリに戻りたくても占領地区との境界線がドイツ軍監視下に置かれたため戻ることができなくなっていたのである¹⁰。

CLCは、最初に美術分野の失業芸術家が集う錬成所(*Groupe d'Oppède*)を作り、その後に音楽分野の錬成所として、失業音楽家によるオーケストラを結成する(以下、「オーケストラ錬成所」)。団員となった音楽家たちの多くは、国立音楽院で賞を獲得していながら、それまで別の錬成所にて「シャベルやつるはしをもって肉体労働を」していた(『報告書』pp.4-5)。しかしこの錬成所により、彼らはようやく本業での仕事が可能になったのである。

注目される点は、彼らへの仕事提供として、クロードル(CALUDEL, Paul : 1868-1955)とオネゲル(HONEGGER, Arthur : 1892-1955)の劇的オラトリオ作品《火刑台上のジャンヌ・ダルク *Jeanne d'Arc au bûcher*》¹¹の巡回公演という大規模企画をCLC自らが主催したことである。CLCは青年局内「芸術主体行動部門」主宰者でピアニストのコルトー(CORTOT, Alfred : 1877-1962)の推薦により「若きフランス *Jeune France*」協会の協力をとりつけた¹²。そしてこの巡演のためだけに、150名から成る「オーケストラ錬成所」に加えて合唱団員、役者・エキストラ、道具方など、失業中の音楽家

と演劇関係者230人を結集させる。衣装や舞台美術の制作には、CLCが組織した「失業女性の家」(リヨン)の女性チームも加わった。5か月間の準備期間の後、夏期を中心に1941年末まで、フランス南部37都市にて公演を実施した失業芸術家たちは、上演期間中は国家 (CLC) に雇用されるという形で生活保障がなされたのである。なおCLCは、若い芸術家が別途職を見つけたらすぐに別の失業芸術家に切り替えることを条件に経済援助した点も特徴である。それにより、約40名の音楽家が年内に入れ替わっている (MAUX-ROBERT 2002 : 74)。この劇場巡演型プロパガンダに生産性を感じ取ったCLCは、最後に「演劇錬成所」を6つ新設し、失業芸術家を対象とした総合的でより大規模な救済策を実施することになるのである (『報告書』 pp.5-6)。

「オーケストラ錬成所」はその後1942年にサン=テティエンヌ市にて、「マスネ・チクルス」と題したオーケストラ演奏会シリーズを開催、成功を収めた。この演奏会シリーズでは、3か月半の間に計110名の芸術家 (7人の技術者、43名の合唱団員、40名のオーケストラ団員、20人の女性ダンサー) の生活を保障している。

「先天的にCLCの使命とは異質と思われうる」 (『報告書』 p.2) としながら、なぜCLCはこうした芸術家 (音楽家) 支援を打ち出したのか。二つの理由が読み取れる。一つは、劇場巡演という事業を実施することで、付随する各種職業 (舞台制作、衣装・宝飾、美術、道具方等) にも仕事が波及するうえ、巡演先の地域における経済・産業にも波及効果が期待できる点である。もう一つは、こうした芸術家の活動が地方の人々の感情に直接作用するため、破綻していた人々のモラルの回復を訴えてフランス再建に貢献しうる「国民革命」¹³プロパガンダとして非常に有効であるとCLCが確信していた点である (『報告書』 pp.5, 7, 15-16, 23-24)。特に後者の理由からCLCは、特殊技能を持つ芸術家たちを彼らの適性にあった職に就けたうえで生活保障をし、最大限の力を発揮してもらう必要性を強調しているのである。次節では、「オーケストラ錬成所」が成功を収めたとされる二つの活動例について、具体的に検討する。

(3)「オーケストラ錬成所」活動内容

①マスネ・チクルス

「マスネ・チクルス Cycle Massenet」とはオーケストラ錬成所が1942年前半 (1月15日から6月上旬まで) にサン=テティエンヌ市にて開催した演奏会シリーズで、大変な成功を収めたと報告されている (MAUX-ROBERT 2002 : 74)。現在のところ、企画者および企画の経緯については不明である。ただ演奏会のコンセプトとしては、国際的に名声を馳せたフランス人作曲家ジュール・マスネ (MASSENET, Jules : 1842-1912) が、サン=テティエンヌ市のモンロー生まれであることから、ゆかりの地にてこの作曲家のオペラ作品を広く住民に知らしめて教養を広めるとともに愛国的宣伝を行おうとしたことが推測できる。筆者の史料調査より判明した上演曲目は、【表1】の通りである。有名なオペラ作品を中心に上演しており、親しみやすい演奏会が目論まれたと思われる。またこの企画は、オーケストラ錬成所に加えて、CLC失業芸術家対策の一つであった合唱団員の再就職¹⁴にも一役買ったと考えられる。

この演奏会シリーズでは、芸術家の生活保障に加えて、「財政的成功とモラル上の成功という二重の成功」を収めた。ここでのモラル上の成功とは、新聞評での称賛にみられるように公演が聴衆から大変好意的に受け止められたことを指す。また財政的成功とは、支出が予算を越えなかったことを指している。CLCはこの「マスネ・チクルス」用に計470,650フランの予算を割り当てたが、実際の支出は団員への有給休暇も含めて計411,951フランに抑えられた。そこで差額の残金 (58,699フラン)

を、国家義援(10,000フラン)、インドシナ鉱山での犠牲者支援(10,000フラン)、サン=テティエヌ市の地域事業費用(10,000フラン)として寄付したほか、戦争捕虜への慰問袋代に充てているのである¹⁵。

【表1】CLCによるマスネ・チクルスの上演日と演目(1942年)

上演日	演目
2月10日	《タイス》
3月8日	労働組合会館による音楽祭(演奏会)
3月10日	《ウェルテル》
3月12日	
3月24日	《エロディアード》
4月26日	バレエ団と軍楽隊による音楽祭
4月29日	《マノン》
4月30日	
5月1日	
5月17日	モントー Montaud 教会(マスネが住んでいた小教区)の記念ミサ(合唱付き)
5月27日	《エロディアード》
5月28日	
6月9日	《マグダラのマリア》

この表は、Chômage artistique “Rapport à Monsieur Maux : Cycle Massenet” (1942年6月16日) [A.N. : 72AJ/2897] に基づいて筆者作成。

②《火刑台上のジャンヌ・ダルク》巡演

「オーケストラ錬成所」最初の公的かつ大規模なこの事業の企画者および企画の経緯については、現在のところ不詳である。しかし筆者の史料調査より、巡演の具体的な仕組みと演出方法、そして当時の評価について明らかになった。

(i) 巡演の仕組み

芸術家たちは1941年6月に地方都市リヨンに結集し、「若きフランス」の中心的メンバーであるバルビエ (BARBIER, Pierre : 生没年不詳)¹⁶の演出と、ドリオル (D'AURIOL, Hubert : 生没年不詳) の指揮でデビューを果たす。その後一行は約2万キロメートルの長旅を開始した。彼らは毎晩異なる町や村にて、野外に大道芝居小屋を設置して上演した。雨などで屋内に入らざるを得ないときには劇場、映画館、市役所などを借りて上演をしている¹⁷。

興行組織は非常に合理的かつ効率的であった。この巡演用に特別列車が用意され、芸術家たちを地方都市へ運ぶだけでなく、舞台に必要な物資(舞台装置、衣装、装飾、楽器など)を搭載した7台のトラックや車両も運んだ。マネージャーは劇団より先に興行先の市町村に赴いて、団体に必要な宿泊所の確保、地元当局との交渉、ポスター貼りやチケット販売、舞台設営に最適な場所の選定をした。そのうえ、その地域の住民を雇用して野外会場を建設し、観客用の座席を用意する手配もしている。劇団も二手に分かれて行動する。公演終了後の夜、出演者たちは宿泊施設でゆっくり休むが、技術スタッフたちはあらゆる資材をトラックに搭載して次の公演の場所まで運送、予定地への到着は夜明けの早朝になることも多い。到着後彼らは、仮設舞台を確認し、架空線路を設置して照明設備を可能にさせ、指揮台を置き楽器を並べる。会場の近くに必要の建物が借りられない場合には、舞台裏に簡素な小屋を作って、俳優たちが着替えたりメーキャップをしたりできるようにもするのである。その後、開演に合わせて出演者たちが到着する。こうしたシステムのおかげで、彼らは余計な心配をすることなく上演に集中することができるのである¹⁸。

（ii）演出について

野外の仮設舞台にもかかわらず、この巡演では舞台美術・衣装が重要な役割を果たしている。若手舞台演出家バルビエは、ジャンヌ・ダルクが死の直前に見た「幻影」を再創造することを努めた。用意した舞台装置は極めて簡素であった。単色で染められた一枚のバック・ドロップ（背景の幕）の前にジャンヌが横たえられる台座が置かれただけである。ジャンヌは白い衣装を身に着けて、他の人物の鮮やかな色と対照をなしている。布織物は「失業女性の家」が制作したリヨンの伝統工芸品であった。演技は抑制されていた。合唱団員は、舞台端まで左右一直線に整列し、劇の最初から最後まですべて不動である。定められたフリースペースにて、役者、子どもの集団、ダンサーたちが次々に行進する。

ここで野外の夜を背景にした照明効果が、大きなインパクトを人々に与えたと考えられる。「プロジェクターの煌めく光のなか、バック・ドロップにジャンヌのシルエットがくっきりと浮き出る。恐怖に煽られた群衆の叫びのなかで火刑台に点火されると、突然、舞台は火刑台を除いて暗転し、暗闇に包まれる。燃え盛る炎の中で、聖女を覆っていた布が消え去り、鎖を断ち切り甲冑を付けたジャンヌが現れて、火に赤く染まりながら跪く。一方で天井から聖母マリアと聖カトリヌ、聖マルグリットが「ジャンヌ、ジャンヌ」と呼びかける。そして夜に向かって合唱のフィナーレ「愛する者のために命を捧げるほど偉大な愛はない」が立ち上る。」¹⁹ 空間と音響の効果的活用が窺える。

（iii）当時の評価

巡演先の多くの市町村はこの芸術家たちを熱烈に歓迎し、会場は大勢の観客であふれた。しかしCLCは『報告書』にてこの巡演を客観的に評価して、「純粋に芸術的観点からみて恐らく正当な批判に値するものである」とし、かつ「財政的観点から見ても、その生産性は成功というには程遠い状態であった」²⁰とした。それにもかかわらずCLCは、この巡演が多くの地方都市の住民に「疑う余地もなくモラルの回復といった感情を抱かせた」点を大きく評価している（『報告書』p.5）。ここでいうモラルとは、事実上の敗戦に際してもなお抱き続ける愛国心や自尊心という意味合いが大きいと考えられる。

フランスの小さな農村に生まれ育ち、強い意志と厚い信仰心で100年戦争（1339-1453年）時にフランス国王を守って殉教した「ジャンヌ・ダルク」のイメージは、ヴィシー政権側のプロパガンダに利用されていた²¹。ジャンヌ・ダルクを主題とすることで、その歴史的な事実およびイメージが、観客にとっての自己および現状に重ねうる希望の象徴として強い印象とともに受け止められたことは想像に難くない。エヴィアン市での新聞評は次のように書いている。「どうしてフランス人が過去と現在を不本意に和解させることができようか、傷ついた祖国がもっとも辛い逆境を体験した、そうした苦悩に満ちた二つの時代の類似性に目を背けることができようか。どうして5世紀もの間この国を守った奇跡の再来を望まずにいられようか。ジャンヌ・ダルクが成し遂げたこの奇跡は、ロレーヌ地方と人々の精気、農民の健全な精神、そして揺るぎなく熱い信心から来たのである。」²²

（iv）イタリアの「巡回劇場」との関連

注目されるのは、エヴィアン市での新聞評が示唆するように、このCLCによる巡回公演の手法が「ファシスト政府がすでに数年前に設立していた「テスピスの凱旋車（巡回劇場）」²³の運営組織に非常に類似している」点である。これは「イタリアの各地方に散らばり、それまで劇場での演劇や演奏会には縁遠かった地方の住民たちに非常に格調高い上演を届けた」²⁴。ムッソリーニ隣席のもとロー

マで開演式を挙げた最初の演劇巡回劇場(1929年)は、南イタリアの13県、35の地域にて67の上演を行っている(柏熊 1943: 49)。CLCが「オーケストラ錬成所」設立および《火刑台上のジャンヌ・ダルク》巡演企画に際してこの「テスピスの凱旋車」を参考にしたかどうかについては、現在のところ史料からは確認できない。しかし両者の特徴を比較すると、明白かつ本質的な類似点が指摘できる。

まず実施に際して、国家と地方が共同して、特別編成の上演グループが各地で芸術的かつ壮大な舞台上演ができるよう後押ししていること、職業的技術スタッフのもとで合理的な興行形態がとられていること、が共通点である。そして、これまで演劇や歌劇、演奏会など都会のハイ・カルチャーに触れたことのない地方の住民たちに対して、大衆の娯楽の場にて高質な上演を廉価で提供することにより、彼らに鮮烈な印象を植え付ける手法にも共通性が見出される。「テスピスの凱旋車」などの事業に関して、「日常生活の単調なきまりきった仕事と堅苦しい慣習に支配された地方都市にあつては、マスメディアとの最初の出会いは、小さなものではあったが計り知れないほど重要な刻印を地域共同体の意識のなかに刻み付けた。そして、ファシスト政府の援助のもとで余暇事業団によって組織されたこうした接触は必然的に、大勢の恩恵と施しにたいする国民の敬意の念を高める効果をもたらした」(グラツィア 1989: 278)ことが知られている。ここで植え付けられる国民意識、ナショナリズム等のイデオロギーは、決して上からの一方的押しつけではない。住民自らが文化的な権利を行使する(チケットを購入して鑑賞する)ことで同じ住民と喜びや感動を分かち合う、そうした住民主体の行為にておのずと植え付けられるように仕組まれている点が重要である。

しかし、CLCによる巡回公演と「テスピスの凱旋車」では相違点も見受けられる。その一つは、前者が芸術家の失業対策を目標に掲げていたことに対して、後者ではそうした目標は前面には出ていなかったことである。そしてもう一つは、後者がイタリア全土にて8年間にわたる成功を収め(柏熊 1943: 47)、「ファシズム体制の底辺を支え、20年をこえる長期支配の基盤を形成」(豊下 他 1989: 413)したのに対して、前者は非常に短期間であえなく終了したことである。

3. CLCと芸術局の連携、音楽家のための錬成所の解体

(1)CLCおよび「オーケストラ錬成所」の問題点(1941年)

1941年2月23日法令にて、北部占領地区のCLCパリ本部は首相に直属する「国土整備企画庁 Déléation Générale à l'Équipement nationale (DGEN)」に吸収合併される。DGENの主要業務は、フランス経済および地方の諸問題を検討して10か年計画を策定し、フランスの労働力を国家の統制下で中央集権的に調整・管理することであった(田崎 2019: 9)。DGENは農業生産の向上と都市開発による生活条件の改善、エネルギー政策や交通・輸送を優先課題としており、知識人・芸術家への失業対策に対しては予算を大幅に削減していく。一方で、南部非占領地区のCLCヴィシー支部は残存した。CLCは国家予算を申請するにあたり、これまでの成果を強調するだけでは足りず、自己改革および新規計画の提案を迫られることになる。実際にCLCヴィシー支部局長モーが1942年4月に記した報告書(注9に同じ、以下『報告書』)では、1941年8月までの活動を総括した際、「オーケストラ錬成所」と劇場巡演型プロパガンダでの失業対策、およびフランス人のモラル向上での成功を強調しつつも、同様の形で活動を継続することはないと断言している。そして、失業芸術家対策における芸術局や国民教育省とCLCとの連携を提案するのである。なおこの時期は、「芸術局とCLCだけが知識人に関与する資格を持っている(前者は文化的観点から、後者は失業の観点から)とみなされていた」(『報告書』p. 14)。

『報告書』は「オーケストラ錬成所」の問題点として、主に二つの点を挙げている。一つは費用がかかる割に再就職率が低い点であり、もう一つは、芸術家（音楽家）たちが「錬成所」という組織を合理的に運営・管理する能力を持ち合わせていない、もしくはその方法を理解していない点である。特に『報告書』は後者を問題視しており、他の知識人とは異なる芸術家の傾向として、1)予算厳守の感覚が欠如していること、2)上演関連の記録を保管してその記録をもとに新規上演を検討するという作業をしないため、毎回の企画が独断的かつ手探り状態であること、そして3)省庁機関による技術監督・指導が受けられていないこと、を指摘している（『報告書』 pp. 8-10）。

さらに『報告書』は、音楽分野を含む芸術系職業における制度上の問題点を指摘する。まず、他の職業分野とは異なり芸術系職業には、政府の宣伝活動を総体として受け止める法的制度、すなわち「職業組織 *organisation professionnelle*」がないことが指摘された。その上、職人とは異なり芸術分野には職業資格というものが存在せず、いわゆるプロフェッショナルとアマチュアとの区別が困難であり、それゆえCLCが本当に支援すべき「失業資格のある」芸術家を特定することが不可能であることも指摘されている（『報告書』 p. 9）。

(2)失業芸術家支援におけるCLC改善案:芸術局との連携

CLCは失業芸術家支援の生き残りのために上述の諸問題を解決すべく、1941年9月から国民教育省事務局および芸術局と連絡をとっていた。CLCからの具体的提案に対して国民教育省事務局長は、CLCの主体的活動を承認するとともに、労働委員会的一种として「芸術家失業対策委員会」を設置することに同意した（1941年11月20日付書簡）。これを受けて芸術局長オトゥクール（HAUTECŒUR, Louis : 1884-1973）が、CLCと協同してこの「芸術家失業委員会」の役割と組織を明文化し、副首相に届けて承認を得る。そして1941年12月からは、CLCの芸術計画に関する行動を規定する憲章が作られることになったのである（『報告書』 pp. 11,13）。

芸術局とCLCが示した「芸術家失業対策委員会」の役割は大きく二つある。一つは、失業中の芸術家により提出される請願書を検討、選別し、実施が決定した計画について財源を確保する役割である。このとき、従来のように予算を編成するのではなく、補助金を支出する形に変更して柔軟性をもたせている点が特徴である。同時に委員会は、単に補助金を支給するのではなく、受給した劇団や巡回公演を調査し評価する役割も担うことになる。もう一つの役割は、特に演劇分野において、「職業組織」結成にむけた調査を実施することであった。

こうした任務を遂行するために委員会は、CLCの財源という条件で、秘書1名と、技術者1名、芸術家1名、会計1名、巡回公演企画者1名から成るチームを芸術局から派遣してもらい、自由に使えることになった。これは、これまで「孤立に悩まされていた」（『報告書』 p.14）CLCの失業芸術家対策事業とは異なり、検討課題分野の専門家がその都度委員会に参加することで専門的・技術的な助言やサポートが得られるようになったことを意味している。また、「芸術家失業委員会」には中央諮問委員会が立ち会うことになる。この中央諮問委員会は、政府関係者の公的代表者たちを中心として、「最高の才能と資質を持ち合わせた」フランス人芸術家（画家、彫刻家、音楽家、演劇から各1名）が選出されて構成されている²⁵。これにより、事業を失業中の芸術家（音楽家）任せにするのではなく、各芸術分野の専門家が事業を監督する形が整ったといえよう。

(3)「オーケストラ錬成所」の解体（1942年）

実は「オーケストラ錬成所」の場合、上記改善案のなかですでに再編成が目指されていた。CLCが

1942年度用に提案した予算を見ると、音楽事業実施用に500万フラン計上されている²⁶が、これは現存の2つのオーケストラ錬成所を採算の取れる別のオーケストラに再編するための査定と選別、および職業訓練のための費用なのである（『報告書』p.20）。

そして1942年、委員会はCLCに、9月30日をもってこれらのオーケストラ錬成所を解消させる決定を申請する。理由は、CLCにとって財政的な負担となっていること、音楽家の再就職が思うように進んでいないこと、そして運営がずさんであること、であった²⁷。「マスネ・チクルス」のような成功例があったにもかかわらず、ドリオル率いる「オーケストラ錬成所」は予想よりも費用対効果が芳しくなかったこと²⁸が考えられる。またCLCは1942年度用事業予算として演劇分野に音楽分野の4倍計上するなど、音楽分野よりも演劇分野に注力する方が失業対策に効果的で重要であると考えていたことが読み取れるのである。

(4) ポスト錬成所のCLC失業芸術家支援：芸術局への役割移譲

CLCの活動は、政治・軍事情勢にも影響を受けた。1942年11月にはこれまで非占領地区であったフランス南部が、ついにドイツ軍に占領される。ドイツはフランス人労働者をドイツの軍需産業労働力として搾取するべくヴィシー政権に圧力をかけていたため、もはやフランス全土にてフランスでの求職活動は認められなくなってしまう。この結果、CLCは1943年1月、正式に幕を閉じる²⁹。その前の1942年11月、CLCにおける失業芸術家のための錬成所は芸術局に移転し、「芸術研究部」となった（SIMON 2009：201, 212）。「失業対策庁は芸術局に、喜劇役者や音楽家の失業予防策を講じることを委ねた」³⁰のである（田崎 2019：11）。

音楽分野に関して芸術局が実施した対策とは、歌劇場、演奏協会、音楽教育機関への予算もしくは補助金増額であった。そしてその財源はCLCからの譲渡金によるものである。ただし、CLCが財源として関与することで、パリ中心の音楽活動のみならず地方の音楽活動支援が積極的になったと考えられる。1942年以降に芸術局が作成した音楽分野支援に関する報告書³¹によると、芸術局はCLCとの連携において次の三つの政策を打ち出した。いずれも地方の音楽活動支援と結びついている点が特徴である。

一つ目は、歌劇に対する予算の大幅増加である。予算増額に際して芸術局は、パリの国立歌劇場連合 Réunion des Théâtres Lyriques Nationaux (RTLN)³²以外の場所での歌劇上演、および地方における歌劇場の再編を促進することを打ち出している。そしてCLCは、芸術局に作品委嘱用の予算250,000フランを譲渡している。恐らくこうした歌劇場での上演を見越した作品委嘱のための費用と考えられる。二つ目は、地方の演奏協会への補助金増額である。CLCはこの目的で芸術局に750,000フランの予算を譲渡した。そして三つ目が、音楽教育機関の連携推進である。CLCと「音楽産業・商業組織委員会」³³（1941年3月12日創設）との交渉により、芸術局はパリ国立音楽院と地方の国立音楽院にて楽器や教育設備に関する協定を取り付けた。なお芸術局は、パリ国立音楽院の学生支援用に1,050,000フランの予算を計上している。

4. 結語

本研究では、これまで芸術政策の視点からのみ考察されてきたヴィシー期フランスの音楽政策について、新たな視点から、すなわちヴィシー期に新設された国家機関である「失業対策庁」（CLC）による失業中の音楽家への生活保障・活動支援について、音楽家のための錬成所に着目して調査と考察を

行った。

今回判明したことの一つは、CLCが「芸術家の」失業対策に力を入れた理由である。それは、単に保障の手薄な領域にまで目配せをしたというのではなく、芸術家による「人の感情に訴える」強い力が政府の「国民革命」宣伝に有効である、という特殊で実利的な理由だったのである。CLCの『報告書』は総括として次のように書いている。「地方で実施しているプロパガンダ（オーケストラ錬成所の演奏会や巡回公演など：田崎注）の価値は、どんなに小さな町であっても人々の感情が高揚して我々の意図する表明が喚起される点、さらには大衆がフランスの精神的文化遺産の豊かさに触れる点にある。とすれば、こうした財政努力による生産の重要性が広く正当化されよう。」（『報告書』p.23）ここで指摘できるのは、パリを占領され地方に落ち延びたヴィシー政権だったからこそ、地方の潜在的価値の発掘に政府が注力する環境が整えられ、それが失業芸術家支援に繋がったことである。それまでオペラやオーケストラ演奏会はパリなどの大都市中心に発達しており、地方ではそうした芸術の存在すら知らない人たちが多数存在していた。しかし、そうした地方向けに失業音楽家を動員してハイ・カルチャーの上演組織を新設することで、人々に大きな衝撃と感動を与え、政権側が描く国民意識やモラルを普及させる機会を作り出すことができたのである。このヴィシー期の取り組みは、戦後第四共和政期において「民主化」というコンセプトを新たに纏うにせよ、政府による文化政策が「専ら地方の文化的貧困状況の是正」³⁴におかれる流れへと連結した可能性が考えられる。

一方で、CLC独自の芸術家（音楽家）の失業対策活動が1941年から1942年半ばまでと短命に終わったように、ヴィシー政権が芸術系職業に至るまで中央集権的に徹底して管理・監督する体制を望んだことの影響は大きかったと考えられる。本研究において、CLC独自の芸術系錬成所は、国家管理の職業組織へと制度変更が試みられたうえ、最終的には既存の組織委員会および芸術局との協力という形で吸収・統合されていたことが判明した。この要因の一つが、音楽家集団と国家機関とを結ぶ組織の運営がうまく機能しなかったことである点も判明した。失業音楽家たちの多くは恐らく、単に求職という個人的動機から錬成所に集まっただけであり、ヴィシー政権の「国民革命」など政治プロパガンダにことさら共鳴していたわけではなかったこと、そのため一つの崇高なイデオロギー目標に向かって協同して作業するという意識が薄く、組織として内部統率がとれなかったことが推測される。またCLCにおいても、恐らく費用対効果の面から、音楽分野よりも演劇分野の方がプロパガンダに有用で注力すべき分野であるとみなしていた痕跡が窺えた。

なぜヴィシー政権亡きあと、すなわち第四共和政期に失業対策としての「オーケストラ錬成所」や巡回劇場が復活しなかったのか。恐らくこれらの手法がファシズムの文化統制手法と酷似していたため、戦後の脱ファシズムの動きのなかで政府およびフランスの人々の間で意図的に無視された、もしくは遠ざけられていた可能性が考えられる。この点の検証については、今後の研究課題としたい。

*本研究は、2019-2023年度科学研究費助成事業（基盤研究(C)（一般）[研究課題番号：19K00233]）による研究成果の一部である。

注

1. 初めての体系的なヴィシー期音楽文化史研究(論文集)はCHIMÈNES (éd.) 2001である。また、当時を生きた作曲家や演奏家たちの態度についての事例研究(論文集)にはCHIMÈNES ; SIMON 2013がある。
2. この制度に言及した初期の研究がCHIMÈNES 1991で、この制度を詳細に調査したのがSPROUT 2000である。その他CHIMÈNES (éd.) 2001、SIMON 2009でも特筆されている。

3. 田崎 2006、田崎 2008の中で失業対策庁の存在について触れ、田崎 2019において失業対策庁に関する史料調査を実施している。
4. Le chef du service du Chômage intellectuel du Commissariat à la Lutte du Chômage, « Note : Pour servir à la coordination des efforts tendant à organiser les professions artistiques, scientifiques et littéraires », p. 24 (1942年4月7日). [A.N. : 72AJ/2897]
5. s.n. “Le chômage intellectuel et les institutions savantes” (日付不明: 推定1943年5月以降). [A.N. : 72AJ/ 2263]
6. 本部は北部占領地区のバリに置かれ、南部非占領地区のヴィシーには支部が置かれる。
7. なおこの数字の中には、フランス在住の外国人失業者は含まれていない (MAUX-ROBERT 2002 : 58-59)。
8. s.n., 1982, “Introduction,” *Urbanisme (1940-1943): Répertoire (19820686/1-19820686/41)*, Archives nationales (France), Pierrefitte-sur-Seine. (https://www.siv.archives-nationales.culture.gouv.fr/siv/IR/Fran_IR_007028).
9. Le chef du service du Chômage intellectuel du Commissariat à la Lutte du Chômage, « Note : Pour servir à la coordination des efforts tendant à organiser les professions artistiques, scientifiques et littéraires » (1942年4月7日). [A.N. : 72AJ/2897]
10. AI. M. “À Evian, Jeanne d’Arc au bûcher : Le « chantier orchestral » du Commissariat au Chômage,” *Le Suisse* (1941年8月10日). [A.N. : 72AJ/2897]
11. 舞踊家イダ・ルビンシュタインの委嘱により1935年までに完成し、1938年5月12日にスイスのバーゼルにて初演された作品。ルビンシュタインは「中世劇の様式による「歴史劇」で、かつ、かつて役者が都市を遍歴した時代における「大衆劇 jeu populaire」の実現を望んでおり、オネゲルは彼女との対話を通してこの案の具体化に貢献した」(田崎 2006 : 60-61)。
12. 「若きフランス」の音楽活動については [田崎 2019 : 12-13] を、CLCへのコルトーの助力については [田崎2021 : 46] を参照。なおCLCは、1941年1月産業労働省の許可の元でこの「若きフランス」を経済支援することになる (1942年3月15日まで)。
13. 「国民革命 Révolution nationale」とは、ヴィシー政権の国家元首ペタン元帥が繰り返しラジオやポスター等で提唱した、フランス人の精神面、道徳面を立て直すことで国家アイデンティティの再確立を図ろうとする「秩序の指針」である。
14. これは、ヴィシー政権による国営ラジオ局が音楽番組制作に必要な合唱団員のリクルートをするためにCLCに打診をした (MAUX-ROBERT 2002 : 74) など、一定の成果があったと思われる。
15. Chômage artistique “Rapport à Monsieur Maux : Cycle Massenet” (1942年6月16日). [A.N. : 72AJ/2897]
16. 彼は少し前の1941年5月11日にも、同じジャンヌ・ダルクを題材にした大規模野外スペクタクル《フランスの乙女のためのポルチコ》の台本を、ピエール・シェフェールと合作で担当している。詳細は KAYAS ; MURRAY 2012参照。
17. 8月にエヴィアン市で上演した際には、風光明媚なレマン湖ほとりの野外仮設舞台にて上演予定であったが、天候が急に悪化したためカジノ・ホールに会場を変更した。上演シーンも迅速に修正(カット)し、15分遅れの開演で済んだ。ただし聴衆があまりに大勢いたので、午後8時からと午後10時半からの2回連続で公演している。
18. AI. M. “À Evian Jeanne d’Arc au bûcher : Le « chantier orchestral » du Commissariat au Chômage,”

- Le Suisse* (1941年8月10日). [A.N. : 72AJ/2897]
19. AI. M. “À Evian Jeanne d’Arc au bûcher de P. Claudel et A. Honegger : l’œuvre et sa realization scénique,” *La Suisse* (1941年8月12日). [A. N. : 72AJ/2897]
 20. 財政的観点に関しては、巡演先ではチケットを廉価で販売していたため、大勢の観客がいたにもかかわらず上演と移動にかかる支出の方がチケット収入をはるかに上回っていたことを意味する。
 21. ヴィシー期フランスのジャンヌ・ダルク受容に関しては、[田崎 2006 : 60-61] を参照。
 22. AI. M. “À Evian Jeanne d’Arc au bûcher de P. Claudel et A. Honegger : l’œuvre et sa realization scénique,” *La Suisse* (1941年8月12日). [A. N. : 72AJ/2897]
 23. ファシズム時代のイタリアにおける大衆組織の「全国余暇事業団」、別称「ドーポラヴォーロ」(Opera Nazionale Dopolavoro) が1929年に演劇にて開始した国家事業。翌1930年にはオペラ巡演も開始した。全国余暇事業団は1920年代半ばにおいて「ファシズムの最も思い切った独創的な制度の一つ」(柏熊 1943: 1) であり、ナチス・ドイツの「歓喜力行団」をはじめイギリス、オーストリア、ソヴィエト連邦もこれに倣った類似組織を設立した(豊下 他 1989 : 414 ; 柏熊 1943 : 2)。
 24. AI. M. “À Evian Jeanne d’Arc au bûcher : Le « chantier orchestral » du Commissariat au Chômage,” *Le Suisse* (1941年8月10日). [A.N. : 72AJ/2897]
 25. 芸術家の他、次の人物により構成される：国家元首の代表 (1名)、副首相の代表 (1名)、国民教育大臣の代表 (1名)、芸術局代表 (1名)、情報局代表 (1名)、財務局代表 (1名)、文学者 (1名)、建築家 (1名)、装飾家 (1名)。この中央諮問委員会は、年に最低10回召集されて行動諸計画を検討し、提案書を中央機関長に提出する役割を担った。
 26. 他の実施費用項目としては、執行機関裁量 (3,200万フラン)、演劇 (2,000万フラン)、造形芸術 (500万フラン)、文学 (200万フラン)、科学 (400万フラン)、伝統の復興 (100万フラン)がある。
 27. Service du Chômage artistique “Rapport à Monsieur Maux” (1942年9月8日) . [A.N. : 72AJ/2897]
 28. 《火刑台上のジャンヌ・ダルク》公演時の新聞評 (エヴィアン市) でも、残念ながら音楽に対する評価は高くなかった。会場が屋内に変更されたにもかかわらず、指揮者ドリオルが野外上演時と同じような過剰な表現をしたことが批判されている。
 29. s.n. “Textes législatifs.” [A.N. : 72AJ/2894]
 30. s.n. “Rapport sur une mission d’information concernant les organismes du chômage non manuel en zone sud.” (1943年8月16日). [A.N. : 20040139/1]
 31. Musique et spectacle, “Note sur les initiatives prises par le Secrétariat général des Beaux-Arts en faveur de la musique, des concerts et de l’enseignement de la musique depuis le mois de Juillet 1940.” [A.N. : F/21/8716] なお、この報告書には日付がないが、音楽関連の三つの組織委員会Comité d’organisation について言及していることから、1942年3月24日政令による「職業音楽組織委員会」設立後に書かれたものであることが分かる。
 32. 1939年に国有化されたバリ・オペラ座とオペラ=コミック座を指す。
 33. 音楽分野で最初に設立された組織委員会。4つの専門部門 (楽器製造、楽譜出版、レコード産業、小売店) から成る。フランス企業のアーリア化の実行、およびフランス内すべての音楽関連企業の調査・管理が目的である (SIMON 2009 : 71-72)。
 34. Robert Wangermée, 1988 “Rapport du groupe d’experts européens,” in. *Conseil de l’Europe, La politique culturelle de la France*, Paris : La Documentation Française, 30. (小林 1995 : 108)

引用文献

フランス国立公文書館史料 [A.N.]

72AJ/ 2263 : Fonctionnement du Commissariat à la lutte contre le chômage

72AJ/2894 : Structures du CLC ; relations avec la Délégation générale à l'Équipement national

72AJ/2897 : Boîte à idées, chômage des jeunes, chômage féminin, chômage intellectuel

F/21/8716 (F/21/NC/472) : Politique musicale sous le régime de Vichy (1940-45)

20040139/1 : Chômage intellectuel et mise en place des équipes de chômeurs intellectuels

s.n., 1982, “Introduction”, Urbanisme (1940-1943): Répertoire (19820686/1-19820686/41), Archives nationales (France), Pierrefitte-sur-Seine.

(https://www.siv.archives-nationales.culture.gouv.fr/siv/IR/FAN_IR_007028)

研究資料 (著者の姓のアルファベット順)

CHIMÈNES, Myriam, 1991 “Le budget de la musique sous la III^e république”, *La musique: du théorique au politique*, DUFOURT, Hugues ; FAUQUET, Joël-Marie (dirs.), Paris : Aux amateurs de livres, 261-312.

CHIMÈNES, Myriam (éd.) 2001 *La vie musicale sous Vichy*, Bruxelles : Complexe.

CHIMÈNES, Myriam ; SIMON, Yannick (dirs.) 2013, *La musique à Paris sous l'Occupation*, Paris: Fayard/Cité de la musique.

グラツィア, ヴィクトリア・デ 1989 『やわらかいファシズム』 豊下櫨彦 他 (訳)、東京 : 有斐閣 [Grazia, Victoria de, 1981, *The Culture of Consent: Mass Organization of Leisure in Fascist Italy*, Cambridge : Cambridge University Press.]

KAYAS, Lucie ; MURRAY, Christopher Brent, 2012, “Portique pour une fille de France” , KALTENECKER, Martin ; LE BAIL, Karine (dirs.), *Pierre Schæffer : les constructions impatientes*, Paris : CNRS Édition, 99-111.

小林真理 1995 「フランスにおける文化政策と法に関する研究(1)」 『人間科学研究』 (早稲田大学) 第8巻, 第1号, 107-119.

柏熊達生 (編), 1943 『イタリアの厚生運動 : ドーボラヴォーロ』 東京 : 泰文堂

MAUX-ROBERT, Antoinette, 2002, *La lutte contre le chômage à Vichy : Henri Maux, le Juste oublié 1939-1944*, Beychac-et-Caillau : Lavauzelle.

SIMON, Yannick, 2009, *Composer sous Vichy*, Lyon : Symétrie.

SPROUT, A. Leslie, 2000, *Music for a “New Era”: composers and national identity in France, 1936-1946*, Doctoral dissertation, Berkeley : University of California.

田崎直美 2006 「ヴィシー政権時代 (1940-1944年) フランスにおけるオネゲル : 作品上演機会と政府関連機関との関係を中心に」 『徳丸吉彦先生古稀記念論文集』 (お茶の水音楽論集 特別号), 55-65.

田崎直美 2008 「フランス・ヴィシー政権時代 (1940-1944年) におけるパリ市の音楽政策 : 定期演奏会事業を中心に」 『アートマネジメント研究』 第8号, 18-27.

田崎直美 2019 「ヴィシー期フランス (1940~44年) の政府機関と音楽政策に関する一考察 : 芸術局と失業対策庁の場合」 『昭和音楽大学研究紀要』 第38巻, 4-18.

田崎直美 2021 「フランス人民戦線政府からヴィシー政権前期にかけての音楽政策(1936~1942年)試論: 連続性の観点より」 『音楽芸術マネジメント』 第12号, 41-50.

豊下梢彦; 高橋進; 後房雄; 森川貞夫 1989 「訳者あとがき」 in. グラツィア 1989, 413-416.

たざき なおみ

平成13年3月、お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科(博士課程) 比較文化学専攻 単位取得満期退学。同年9月、博士 [人文科学] (お茶の水女子大学) (乙第153号)。現在は京都女子大学教授、昭和音楽大学非常勤講師。著書に『抵抗と適応のポリトナリテ——ナチス占領下のフランス音楽』(アルテスパブリッシング、2022年)、共著に『音楽教育実践学事典』(音楽之友社、2017年)、上垣豊(編著)『はじめて学ぶフランスの歴史と文化』(ミネルヴァ書房、2020年。「歴史の扉14 フランスの音楽文化」を寄稿)、榎本泰子他(編著)『上海フランス租界への招待——日仏中三か国の文化交流』(勉誠出版、2023年)などがある。

